日本生物學會誌

第　5　号

10.1.15

日本生物學會

1979年 5月10日

もくじ

半仙半魚：偏見と独断 (5) …… 141

S・S：恐るべき人間集団の魔性 (1) …… 144

S・S：恐るべき人間集団の魔性 (2) …… 147

熊 太郎：大学とのかかわり …… 151

野 良：哲学雑話 (3) 毛沢東 (その3) …… 153

蜉蝣雲：“手記”「ある生態学徒の堕落」(3) …… 157

書 評：なだ いなだ著「わが輩は犬のごときものである」(チビ) …… 169

書評特集：奥野良之助著「生態学入門」 (サンクト T.U.) …… 171

編集局だより …… 174

編集者への手紙 …… 174

広告欄 …… 175

1978年度 会計報告 …… 176

偏　見　と　独　断　（5）

数年前、北海道へ3ヶ月間ほど、魚の養殖（主にヤマメ）を習うために行っていた時の話である。飛行場のある千歳からさらに数キロ山奥へ入った所の養魚場であった。北海道へ渡ったのが9月末のころで、もう紅葉の最中であり、車中から見る景色は、あたり一面がそのために黄色味がかって明るく、特に夕方の景色には子供のころにひそかに描いていた北海道のイメージをそのまま再現でき、養魚場の事もわすれ見入っていた。「ヤッパリ北海道はいいな！」

だが、皮肉な事に、養魚場へ行って最初に悩まされたのがこの紅葉（紅葉して手のひらほどもある落葉樹の葉）なのであった。その養魚場に住み込む事になり、夜間は私一人になった。北海道では秋ともなれば夜は冷え込み、養魚場でもたっぷり石炭ストーブをたき、十分室内を暖めてから寝るのである。だが夜、天候がくずれ風が吹こうものなら大変である。夜中（あるいは朝早く）、ミゾレや雪の降る中を、池の水の取り入れ口にあるスクリーン（金網）にひっかかっている落葉を、取り除きに行かねばならないのであった。起きている時はまだしも、こちらが寝入ってから幾度も、札幌にいる養魚場主から電話で、「すまないが、起きてスクリーンの落葉を取り除いてくれ」といわれ、雨ガッパに着がえ完全装備で出かけ、仕事を終えて帰ってきたものの体が冷えきって、今度はなかなか寝つかれない。「たかが風が吹いたくらいで、いともたやすく落葉を落すな」と、落葉樹をのろったものであった。それでも一応紅葉が終り、池の周囲が雪でおおわれるころになると、どこからともなくそこにいろいろな鳥が集まり、内地から持ってきた双眼鏡で観察するのが一つの楽しみになった。なかでも、一番奥の池のそばにあった松の木に、朝夕、内地では見たこともない一羽のタカ（だと思うが）が来て、池の魚をねらっているのを観察して、毎日楽しんだ。

ある時、この話を、まだ私より齢の若いここの養魚場主にした所、いつもは金もうけの趣味しかないのかと思っていたのだが、急にハッとしたような顔になり、「それはどんな鳥か」などといろいろ聞いて、いっしょに双眼鏡をのぞきこんだ。「この人も、鳥に興味があったのか」と、私は感心したところ、そうではなかった。「よし、今度こそ一発（銃）で仕止めてやる。たぶん、以前にも来て魚を採っていった奴だろう」

それからしばらく、雇われ人が雇い主に説教するハメになった。

「たかが魚の1匹や2匹、いいではないか。その鳥はたぶん禁猟になっているし、タカは魚だけでなく池の周囲のネズミなども採るのだから、かえって池のためにもいいはずだ」果ては生物学の本をとり出し、食物連鎖（本当はその内容をよく知らなかったのだが）まで引用してしまった。

だが、こちらがいっしょうけんめい説得すればするほど、互いにだんだんしらけていったのである。

話し合う前に、互いに根本が異なっていたからである。私の方はその鳥が好きであり（興味があり）、その鳥が毎日観察できる様にありたいという考え方の上に、いろいろな理由をこじつけに言っていたにすぎず、又、相手は、自分の生活がおびやかされるという考え方であり、「タカがタカではないか」というのである。しまいには、もしこの鳥によって生じたいかなる損害にも、「お前は責任をとれるのか」という事を言われ、この事態をどうするのかの決定権が、当然生活のかかっている相手にあることを認めざるを得なかった。ただ、私としては、彼の銃の腕を信頼して、うまく逃げるだろうと期待していた。結果は、やはり、彼の放った一発が、ものの見事はずれて、数秒後このタカが事態の重要性を認識してか、どこかへ飛び去り、それからしばらく池にあらわれなくなった。そして我々二人は、お互いまったく異なった考え方から、まったく同じ言葉を言ってしまった。

「もう二度と来るな」

さて、これだけで文章を終りたいところなのだが、これでは“独断と偏見”がない。これがないと生物学会誌がまともになりすぎて、原稿が集まらなくなるのではないかと心配である。独断と偏見とは、自分のわずかに経験した事柄を際限なく拡大し、それを基に自分の言いたい事をぶちまけるというのだろう（それを“経験主義”といえるほど、齢をとってはいない）。

前にも書いたように、私も北海道から帰って、自分で養魚場をはじめるようになって、生活の糧を得るための仕事と、自然（かなり山奥）とのかかわり方が、それ以前とかなり異なってきた事に気がついた。周囲の環境があらゆる面で、自分の生活にかかわってくるのである。心地よい晴天の日が続けば、その次にはすぐ水が枯れるのではないかと心配が沸き上り、雨が降りすぎれば、土砂で池が埋まりはしないかと心配し、一面の銀世界に見とれていても、すぐに道路が埋まって自動車が動かなくなるのではないかと気になり、と例を上げればきりがないくらいである。そして、その事は又、周囲に住む人々の生活ともすぐかかわっていくのである。（例えば、晴天で水が少なくなれば、養魚場の水と村の飲料水、田や畑に流す水との関係で、いろいろ調整されなければならない）

そこでは、もう都会人が精神の安定とやらを求める“自然の美しさ”だけではすまされないのが現実なのである。そんな都会から離れた自然の中で生活するという事がどういう事なのか、知ってか知らずか、公害問題では社会的強者の立場に立ったため何の成果（解決）もあげえなかった学者達が、今度は“自然の美しさ”を愛する余裕のある金持や、自分の生活の場ではあらゆる事が経済第一という現実に自然をつぶしてしまった都会人らの声を背景に、“自然保護”という言葉でもって、又少数派（弱者）をいじめにかかっているのである。何も、自然を破壊し、そこに住んでいる珍しい動植物（学識のある人はこれを、学問的に貴重な動植物という）を殺してしまえ、と言っているのではない。美しいものは美しいだろうし、学問的に貴重（この言葉はいく分怪しげだが）だと思ってもいいだろう。しかし、都会人や学者が、自分達のまわりの自然を、自分達の生活がしやすいように変えたい

（町の中の通りをクマが歩いている事は、だれも望まないだろう）と願っている様に、人里離れた自然の中に住む人も、やはりそう思っているのである。この、自分達の生活の場をいかにするかは、本来そこに住む住民に決定権があるはずだ、という事を言いたいだけなのである。その原則を認めた上で、美しい、貴重、ウンヌンを、声を小にしていうくらいならいいだろう。

これだけ言えば、一般の都会人には理解していただけると思う。しかし、やっかいなのは、"学者"という部類の人達である。もし、当養魚場に非常に珍しい（学問的に貴重な）鳥が魚を採りにきたら、学者達はその鳥をどう扱かうかの決定権を私に与えてくれるだろうか。とてもその様には思われない。学問的に貴重なものが、ちっぽけな養魚場に住む人間の生活とどちらが大切か、という問題は、これまでの例（イリオモテヤマネコ、ニホンカモシカ等）でもうはっきりしていると思う。彼等は、学問的に貴重といえば何でも通ると思っているようだ。西表でイノシシを採って生活の糧にしている老人や、わずかばかりの田畑を耕やしサルの害に苦しんでいる農民の生活が、サルやヤマネコよりも大切だと、理屈ではわかったとしても、「そうですか」とあっさり引きさがる相手ではないのである。

自然を、個人々々の生活の場として見ようとはせず、自分達の学問研究の場として見ているのである。すなわち、住民達の"自然をどうするか"という決定権を無視し、今の政治家の「国家のため」という名目と同じ様に、学問研究という名目で、自分達にあると思っているのである。彼ら（学者）も政治家と同じく、「国民の役に立つ」ということをよく言う。もともと学者というものは、その研究を論文なりにして、ヒト（他人）に発表するもので、それを受けとる方が、「役に立ちました」とか「大変迷惑でした」とか言うのが当り前の理屈であるのに、「だれそれの役に立ちたい」というのならまだしも、論文を書く前の研究の段階で役に立つ（だれの？）と平気で言っているのは、独断・偏見を通りこして、欺慢・横暴とでも言うほかない。

お上（かみ）からいい子に思われようとするから、「国民の役に立つ」という様な事を言わなければならなくなるのである。学者は、自分がいいと思う考え方で研究すればいいのである。自分達の生活の場をどうするかの決定権を持つ住民が、それが「役に立つ」と思えば、「お役に立たせて」もらえばいい。学者が大学の外で（社会の中で）できる事といえば、それくらいの事である。（内でやらなければならない事は沢山ありそうだ）学者が、たかが養魚場の人間が、百姓が、という事を言わず、又、学問研究が住民の生活権より優占する、などと言わないで自然保護を考えれば、それぞれの場所での問題について、住民との話し合いの道も開かれるのではなかろうか。

下世話に言う、「魚心あれば水心」。

（半　仙　半　魚）

恐るべき人間集団の魔性 (1)

近ごろ、おもしろいことなど何もないので、野良氏の「大学学」について考えてみた。ただし、"考え"がどの方向へ進行していくのか予想もつかない。

野良氏は「大学とは何ぞや、を問う学問」大学学で、「帰納とは"一つ一つの具体的事実から、一般的な法則をみちびき出すこと"である。大学学の研究対象は、いうまでもなく"大学"であるから、一つ一つの具体的な事実とは、大学の中で毎日おこっているさまざまな現象、ひらたくいえば出来事のことにちがいない。大学学研究の第一歩は、そういう出来事を広く集めて記載することとなる」(47ページ)と述べていますが、大学学研究の事例となるかどうかわかりませんが、ここに一つの実例があります。それを述べてみようと思います。野良氏は「事実の集め方は、中立公正でなければならぬ」と言っていますが、この例はいくらか中立公正でないかもしれません。なにしろ自分の経験と偏見と独断をもとにして話しをするのですから。

大学教官の仕事の一つに、研究というのがありますが、その研究結果を報告する場が学会です。その学会でおもしろいことがあったのです。ある有名な大きい学会ですが、どういうわけか、私もその学会に、いやいやながら行かされるはめになり、やむをえず出席しました。二度ほど、学会へ行ったことがありましたが、いつも感ずることは、まったくおもしろくないということです。

それで、どうしておもしろくないのか、考えてみました。理由の一つは、たいへん簡単で、私自身が、おえらい先生方の御立派な研究内容を、理解できないことです。ここに二つの意味があります。それは、私自身の思考活動が鈍いことと、私自身の興味あることより別のことを考えようとすると、自動的に思考活動が停止してしまうような性質があるということです。もちろん、意志によって思考活動を回復させることができますが、それを実行しようとすると、たいへん苦しいことになります。さて、第二の理由として、多数の御立派な先生方が、集まっているところに、自分が置かれると、疲れるからです。自己の世界とまったく違う見知らぬ人々の中にいると、それだけで疲れるものなのです。どうしてかといえば、研究結果を発表した人に対する質問の時間で、質問者が、質問者自身の研究結果と発表者の

研究結果とが一致したことを、発言すると、発表者が“ありがとう”と言うのです。どうして、そこで、発表者が“ありがとう”と言うのでしょうか？　だれかおしえてください。それは、多分、自分の研究が支持され、それで安心したので、“ありがとう”と言ったのかもしれない。画一化された集団のなかで安定し、安心感を得ているようだ。

ここで、画一化された集団のなかで安心している見知らぬ人間たちについて、もう一つ実例をあげて、考えてみようと思います。

私にとって、先生がたの御立派な御研究などにはまったく興味がないものだから、演題の内容を自分自身にむりやりわからせようとしますが、まったくだめでした。それに、一回の発表が２０分ぐらいですから、考えるひまもないくらいにすぐ終ってしまいます。それでも、御立派な先生がたが、まじめくさった顔をして、私のまわりでメモをとりながら聞いているものだから、私もその“まね”をして、　　いているつもりでしたが、まったく発表者の声が耳に入ってきません。

そのとき、この“まね”（聞くふりをすること）について、気がついたことがあります。それは、私が私自身の知らないうちにこの“まね”をしていたことである。みんながそうしているから、自分自身もそうしなければならないかのような幻想におそわれ、無意識のうちに“まね”をしていたのです。私の存在は無意識のうちに人間集団の行為によって規定されていたのです。そうなることによって自己を社会の強固な人間集団と一致させ、そのなかで自己を安定化させていたのである。気持わるい！　それにしても恐るべき人間集団の魔術！この魔術にひっかかると、自己の個性を失ってしまいそう（自己の存在が失われるのかもしれない）。無意識は情緒とからみついて、人間集団によって規定されるときがあると思います。私自身も私の知らないうちに、見知らぬ人間になりそうだ。

話しをつづけると、この絶望的な努力（おもしろくない研究発表を聞こうとする努力）にもかかわらず、考えることは、早くこの学会が終ってくれないかなあ、ということばかりでした。大学から金をもらっているのですから、と思って、演題の内容を理解しようとしましたが、やはりむだでした。いやいやながら聞くふりをするのはなんとつらいことでしょう。単なる知識だけについて聞いていてもなんの興味もわいてこない。いいかげんにやめてもらいたいものだと思っていましたが、私のそういう考えに関係なく研究発表は進行していきました。

その研究発表会で、ある大学のある研究者が発表したときのことです。その人が「……○○教授からやらされた研究……」と、どういうわけか言ってしまったのです。その人は意識しないで、自然にその言葉を口に出したのです。さあたいへんなことになりました。その人はあわてて「……私がやった研究……」と言いかえました。これは積極的に自らおこな

った研究でありたいとさけんでいることなのです。外国に留学し、そして教授にたいして、従順にしたがってきたのに、このような言葉を言ってしまったので、今までの彼の努力が全くむだになってしまってはたいへんとばかり、いかにもみずから進んで研究をやったかのように（教授から与えられた研究ではなく）、　　かけたのです。それは、ほんとうに、積極的に、教授から与えられたのではないという研究をやったのだ、と他人にみせかけて、自分をごまかしていることなのです。

その研究者は無意識のうちに彼の研究は「やらされ仕事」であることを認めたのですが、次に、彼の意識自体がそれを否定して、自分でやった仕事（他人からおしつけられたのではなく）であるかのように、それをごまかしている。大切なことは、「やらされ仕事」自体に問題があるのと（「やらされ仕事」とは特別な人間が他人を自分の私物、あるいは道具のように使用用することであり、人間を人間としてみなくする仕事である）、いつのまにか意識自体に虚疑性が現われていることなのです。それは、人間が仮面をつけることであると思います。彼だけが「やらされ仕事」をやらされているのではないとすれば自分の仕事や研究に対して、彼のように「やらされ仕事」→「自分でやった仕事」として置きかえている人は仮面をつけているのです。多分、大多数の学会出席者はそうなのでは？（これは独断）。とすれば、学会とはまるで仮面舞踏会のようかも？（これは私の直観から判断して）

ところで、その仮面はみんな同じ種類のものをつけていると思います。なぜなら、研究が認められ、社会的地位を得るために（他者を自分の利益のために）、機械のように操作し、そして、平気で他人や自分をごまかすという画一化された仮面をつけているからです。そんな人々は仮面をつけているから、私にはどういう人たちなのかわからない。そういう画一化された見知らぬ人々のなかにいるから、非常に疲れるのです、というぐあいである。だから、仮面をつけた人間集団のなかで安定化し、そこで安心感をもつことなどできないのです。そのような集団のなかでは、不安と疲労感しか感じない。画一化された多数派のなかでの安定性など“うそ”である。もっとも、だれでもそのような仮面をつけているのかもしれないが、知らず知らずのうちに虚疑性という仮面をつけているのかと思うと、不安になってくるのです。不安とは無知（無）に由来するのではないだろうか。

私の存在が世界内存在であるから私にとっての「やらされ仕事」というものは、現階級社会によって、無意識のうちに規定されている場合があります。というのは、自分でも知らないうちに、自分が「やらされ仕事」の体系のなかに組みこまれていることがあるからです。それは、自分が他人を道具として利用する立場にまわされているという場合である。教授は私に学生実習のあどかたづけを「他人を使ってやってくれ」という。そういうとき、つい「はい」と言ってしまう。あとで、自己自身の考え方とちがっているから、しまったと思う。ときどき、

このような意識の虚疑性の正体をみせてしまうのです。まったくどうしょうもない自分なのである。

「やらされ仕事というものは、我々自身の欲求に従って、我々が主体的に実行する仕事ではありません。私も○○の研究という「やらされ仕事」をしなければならないのです。自分の自由（自分の欲求に従ってやりたいことをすること――他人に迷惑をかけないで）を教授に売り渡して、教授の研究の奴隷となり、そのかわり、賃金を得て、生活しています。そして、労働の終ったあと、自由な時間を得て、好きなことをしている。労働の時間は自分を機械人形とし、労働が終ったあと、ほんとうの自分をとりかえすのである。それは、二重生活というべきものであってその「やらされ仕事」を「みずからやった仕事」に移行させてしまうことなどできないのです。もしそうするならば、それは、機械人形を主体性ある人間として考えることになるからです。この意味は人間を機械として考えてもかまわないという結果になりますから、それは、どうしてもしてはいけないことなのです。

生きるってむずかしいですね。全然楽しくないや！　（つづくつもり）

（S・S）

恐るべき人間集団の魔性（2）

これまで（1で）、次のようなことを述べてきました。自分が（私が）人間の集団（もちろん、それに体制を含めている）のなかで、強固な土台を得ようとし、そして、そこに安心感を求めようとしたとき、自己を失って、機械人形となりはて、そこに行動と意識の虚疑性が現われる、と。そのとき、自分自身の環境（社会的存在）によって、無意識のうちにそうさせられるのではないかと思っていました。

しかしこの記述のしかたにはうそがあるように思います。その理由を書いてみます。たと

えば、教授は私に「私の実験データの整理を事務員にやらせろ」と言うと、そんなとき、私はすぐに「はい」と、無意識のうちに、言ってしまう、と書きました。しかし、それは本当に無意識だったのだろうか？　無意識のうちに、自分では知らないうちに「はい」と言ってしまう、と明記しましたが、実は、そうではないことに気がついたのです。無意識ではなく、「はい」と言うこと自体が、悪いことであるのを知っていながら、「はい」と言っているのです。だから、「無意識のうちにそうさせられる」という表現のしかたにごまかしがあるのではないか、と気づくようになりました。無意識ということに問題があるのです。

それは「無意識のうちにそうさせられた」のではなく、みずから意識して、それを知っていて、すなわち、強固と思われている土台（支配者や多数の人々のなかでの安定性）に自己を隷属させ、そこで安心していることを自分自身が知っていて、また、他人を機械や道具のように利用し、それがまちがっていることを知っていて、まるでそれらのことを知らなかったかのような“ごまかし”をやってしまったからである。無意識のうちに、知らず知らずのうちに、そうなってしまったというのは、自分自身のごまかしをかくすための一つの逃避であったのです。というのは、「無意識のうちに」という言葉には、自分自身の知らないところで、また、自分とは関係なくというイメージが入りこんでいるからです。このように考えると、まちがっている自分に対する恐怖感がなくなるのである。

これまで述べてきたことをもっと考えてみようと思う。個人が、多数の人間集団や体制あるいは支配者の奴隷となるのは、それらによって自己の人格が破壊されるという一面のほかに自分という存在をみずから支配者（圧制者）に売りわたし、自主的に支配者に隷属することを切望する場合もあるのではないだろうか。それは自己の内部に隠れている全体主義の萌芽と考えられるものではないでしょうか。

このことをこわから示してみようと思いますが、もう一度、はじめから考えることにします。ある特別な場合に、ある個人が多数の人間集団あるいは支配者（圧制、抑圧者）に自己を売りわたしていることを、みずから、知っていながら、集団に、支配者に自己を売りわたしてしまい、また、売りわたしていること（自己を）を知っていながら、無意識のうちに売りわたしていたのだ（自分の知らないところで）、という“ごまかし”をやってしまうのです。そして、みずから自己を悪魔に売りわたしていることを、自分に認めさせるのに、不安があるからみずから欲して、うそをつくのです。ここに不安からの逃避があり、そういう“ごまかし”をやれば、まるで自分に罪がないかのように、気持が、ある程度、楽になり、罪を犯したという不安を解消することができるかのように、錯覚したのである。また、そうすれば、多数の強固な土台のなかで安心できることになる。しかし、実際は、ますます苦しくなるばかりである。

さて、「無意識のうちに、強固な土台によって、自分が奴隷にさせられる」というのではなく、自分自身が自己の欲求に従って（安心感を得るという欲求）、自分を支配者の奴隷にするのであり、みずから「そうなるように切望する」のである。その意味は、支配者は被支配者を操作し、搾取するが、しかし、被支配者の方でも、それを知っていながら、あるいは、みずから欲して自己を支配者の奴隷にすることなのでは。

この「支配者への従順」という欲望についての例をあげてみようと思う。たとえば、人間が労働するというのは、多くの場合、自分の好きな仕事（自分が、本当に、その仕事なるものを好んでいるかどうか、よく考えなければならないが。とにかく好きな仕事があるとしよう）をするのではなく、支配者から与えられた「やらされ仕事」をするのだから、自分のやりたいことをするという欲求にさからって、忍耐強く、我慢しなければならない。また、気持がいらいらしてどうにもならないときでも、仕事をやらなければならないから、自分の感情性を自分で抑圧しなければならない。そして、その「やらされ仕事」は、個人の意志に関係しない領域である上部から個人を操作するのである。そういう状況のなかで、どのようにして自分を持ちこたえるようにするのか、といえば、個人によって差があるけれども、自分で、みずからを機械化、道具化させて、その状況に自分を適応させるのである。それは、自己をただ機械的に労働するだけの自分に変容させてしまうことである。そして、その意味は、みずから自分を機械人形とすることを選ぶのであって、その方が、自分にとって楽だから、そうするのであり、それは、自発的な欲求（楽なほうを選択する欲求）にしたがった行為であるわけだ。これは「従順への欲望」とよぶことができる。

したがって、社会的な労働条件によって、人間が機械化、奴隷化させられる（社会的存在によって、人間が機械人形にされる）場合と、個人の自発的な欲求に従って、みずからを機械人形にしたて、支配者に隷属する場合もあるのではないだろうか。しかし、後者の場合で、自分の日常生活（賃銀を得るため）をするために、やむをえずそうしているのである。と考えられないこともない。しかし、次の例は明らかにそう解釈できないのではないだろうか。

たとえば、私の「やらされ実験」（おもしろくもなく、まったく興味のないものです。また、生活のため、しかたなくやっているもの）が、ときたま、うまく進展するときがあります。そんなとき、もう一度、そのおもしろくもないような「やらされ実験」をやりたくなってくるのです。この心理は、いったいどういうことなのだろうか。いい実験データをあげて、人に示し、そして、その実験データに対して支配者（教授たち）から高い評価を得ようとして、それで実験をやろうとするのである。みずから、評価を切望するから、おもしろくもない「やらされ実験」をも、やろうとするのです（みずからの意志で、仮面をつけることなのだ）。それは安心してよりかかることのできる多数の人々からの評価を得て、自己を安定化させることを意

味する。自分の「やらされ仕事」という意識をごまかして、自己を消失し、多数のなかでの安定性を得るために、虚疑の意識を持った自己に自分を変容させることになるのだ。このようなことの意味は、自己を失ない、自己をごまかし、そして、自分が単なるぬけがらになってしまうことを、みずから知っていながら、それを実行するのである。それらは、無意識のうちにおこなわれるのではなく、みずから、そうなること（ごまかしをやっていること）を知っていながら、また、それを欲し、その行動をするのです。支配者からよくみられたいために、みずから自己を失なうことを切望しているのであり、自己を機械化（非人間化）して、支配者たちから道具のように自分が利用されることを欲することである。

そうなると、支配者というものを自分自身のなかで、理想化し、その高い理想に向かって自分を歩ませることになるのだ。理想に対する欲望は支配者という権力にむかって、自分が収束することなのです。一般的な意味での理想に対する欲望は、自分を制圧してくれる支配者を待ち望むことなのでは。これは、みずから支配者をつくりあげてしまうことであり、あるいは支配者を選び出していることなのです。また、みずから支配者を、権力を設定していることでもあるわけだ。ここに何か全体主義的な傾向の萌芽がみられるのではないだろうか？　権力を志向しているから。

以上、ここで考えたことは、自分には、自我に対する不安を解消するために、「従順へのおそるべき欲求」を持ってしまうところがある、ということです。

これまで、不安と恐怖の区別について述べませんでしたが、不安とは特定の対象なしにおこる感情であり、恐怖とは特定の対象が、明確に、決定されているときにおこる感情である。たとえば、自我というものは、明白に、わかっていないから不安なのであり、高い断崖の上に立つときおこる感情は恐怖なのである。

最後に、人間の無意識の中に隠された“うそ”を見ぬく必要があると思う。それで、表題の人間集団の魔性に、個々の人間の魔性を加えなければならない。けれども、そういう人間の魔性をどのようにして、こわしていったらよいのだろうか？

（S・S）

大学とのかかわり

飯　　太　郎

日本生物学会誌の第3号を拝見した。以前の号のように（うすぎたない）個性的な字が、並んでいることはなく、全編タイプである。だから私も書く気になった。すなわちタイプしろということを強制しているのだが。ただタイプ子にいささか申しわけないと思う。

日本生物学会と大きな看板であるが、どうした訳か、やたら特定大学のことばかりでマスターベーションしている。それが日本生物学会であると思われても、会費を払っている会員としては遺憾である。会を底辺で支える余計者も居るのだということを主張することも、また書く気になった理由の1つである。

ここでは、大学、とりわけその環境と私とのかかわりについて書き、「研究教育活動の場」としての大学の多面性を少々述べておきたい。

私の勤務する某女子大学は、東京近郊にあり、周囲を宅地造成によって侵蝕されつつ、大学の望しいパターンを造り出さんがためであろうか、若干の緑を保って存立している。私と大学のかかわりもこの若干の緑をめぐって展開される。断っておくが、私は、生物学の徒ではない。

数日前、停年教授が植えた梅の木、十数本から、ほぼ一升ほどの梅の実を採った。これは、今年で2年目である。今年は、手入れの行きとどかない梅の木は、油虫で満ち満ちていたが、それでも一本の木には数個の実がついていた。梅の実は、採らなければ、もったいなくも自然に落下し土と帰していくだろう。この梅の実は、私の大学では6月中旬に採るのがよいようである。早くては、青すぎて、にがい。多少黄色くなりはじめたころ、かといって落ちてしまってはいけないので、採る時期には気をつかう。梅の実は、青いころ採ったものは梅酒もよかろう。それよりも梅ぼしにするのが最も良い。梅ぼしのつくり方について書いてもみたいが、金沢の梅は、金沢流のつくり方で梅ぼしにするといいし、私の大学の梅は、その流でやる。それが、その土地の梅を最上に生かすことだ。

梅が実をつけるころ、5月上旬～中旬には、サンショも又実をつける。サンショの若葉は汁物に少々浮かべても、色といい、香りといい、良い。ここでは実について書いておく。実は固くならないうちに葉もまぜて採る。一本の木があれば、数キロは採れる。ただ採るときに、とげがささって多少痛いが。また実をつけない木もあるので注意。実はさっと湯であくぬきをしたあと砂糖としょう油で煮てつくだにする（私の母の方法）。そうしておけば何年だって保存できる。暖い飯にのせて食すれば最高。「サンショは小粒でピリリとからい」というように一粒でも口の中がさわやかになる。仁丹より良い。

秋には、松林には、ジネンジョができる。松や雑木にまつわりついたつるをたぐって行き、そこを掘る。私の大学は平地であるために1m以上も掘り下げねばならない。途中でイモを折らないで掘り出すには、忍耐力が必要とされる。すりおろして食すれば、やおやで売っている水っぽい山イモとは違って、ねばねばねばとしていて、ときには口のまわりがかゆくなる程である。

イチョウ並木も大学のアクセサリーではない。秋には、ちょうど大学祭の前にはギンナンが落ちる。面倒だが、肉をとりのぞいて実のみにする。私の大学では、そうして大学祭のときに地域住民に売っている職員もいた。

こうして書いていくと大学の草木（庭樹としての月桂樹も乾燥させれば貴重な香辛料である）のかなりのものが食料と化してゆく。大学は、都市部での食料採取地だ。大学の緑はアクセサリーではない。そして、そこで働く者は、支給される現ナマだけを獲得するだけではなく、食料そのものを直接、採取することが必要なのだ。採取地を多く占有する大学の諸氏は、むなしい（?）空論に終止せず、もういちど実体としての大学、土地もあり、木もあり、水もある大学をみわたすべきだ。

哲　学　雑　話　（3）

毛沢東　（その3）

最近の中国では、“4人組批判”の波に乗って――乗りすぎて？――、“偉大なる毛沢東”に対する批判まであらわれてきたようです。もちろん、マオさんといえども人間、神様ではないのですから、間違っているところがあって当然のこと、だから、批判すること自体は大変結構なことです。ですけど、欲をいうなら、マオさんが生きているうちにしてほしかった、死人に口なし、これでは毛沢東の反論が聞けないではありませんか。

もっとも、我が“哲学雑話”は、もともと“雑話”ですから、4人組が批判されようが、マオさんがおこられようが、そんなこととは関係がありません。今回のお話は、毛沢東の「実践論」から、ものごとの認識はいかにしておこなわれるか、ということです。

認識などというと、話がむずかしくなってきますが、私たちが毎日、見たり聞いたり嗅いだり味わったりして、いろいろなことを感じたり、それをもとにして考えたりしている、そのことがそのまま認識なのですから、別に大した話でもないのです。このごろは、五感を通じて外界の“情報”をとり入れる、などと、気取った言い方をよくします。ところで、本論とあまり関係はないのですが、この情報なる言葉が、実は私、大きらいで、何かというと“情報、情報”と言って喜んでいる男、女でもかまいませんが、を見ると、どついたろかと思うほどです。どつき返されては困りますので、まだどついたことはありません。それで、真にやむをえない場合、というのは、情報を売りものにしているやからを冷やかすときなのですが、それ以外では使わないようにしています。なぜ情報なる言葉がきらいなのか、と真面目に聞かれたら困ってしまいます。理由はないのです。ただ何となく気にくわない。こういうのを、五感以外の感覚として、第六感といいます。これを話に入れると、ひときわ面白くなるのですが、真面目な“哲学”の論議ですからここでは割愛することにして、ともかくここらで、毛沢東の言うことを聞いてみましょう。

「もともと人間は、実践過程において、はじめのうちは、過程のなかのそれぞれの事物の一面、それぞれの事物のあいだの外的なつながりしか見ることができない。」

この段階の認識を毛沢東は、「感性的段階」と名づけます。要するに、いろいろなことを感覚で感じとった段階のことです。「実践論」を書いたころの毛沢東は、歴史にのこる“中国紅軍の大長征”を終え、華北の地延安に根拠地をきづいて、来るべき中日戦争に備えて力を養なっているところでした。延安を視察に来た人を例にとって、毛沢東は、「感性的段階」の説明を続けます。はじめの1日2日、これらの人は、「延安の地形、街路、家屋などをながめたり、多くの

人に会ったり、宴会や交歓会や大衆集会に出席したり、いろいろな話を聞いたり、さまざまな文献を読んだりする。」

1日や2日で、これだけのことをするのは大変ですが、そこは革命中の中国のこと、平和な金持ち国日本とは違います。でも、こんなことは、ほんの手はじめ、毛さんは続けます。

「これらは事物の現象であり、事物のそれぞれの一面であり、また、これらの事物の外部的なつながりである。これを認識の感性的段階、すなわち感覚と印象の段階という。」

ある大学のある教室のある教授があるとき、大多数の教室員の反対をおしきって、民主的教室会議を一方的に解散してしまったことがありました。かれは、なぜ解散しなければならなかったかということをたくさん述べ、「これは私の感性的認識であるが、まちがっているとは思えない」と結びました。こういう使われ方をされては、地下の毛沢東も苦笑いといったところでしょう。毛沢東はすぐ続けて、次のように書いているのです。

「これが認識の第一の段階である。この段解では、人びとは、まだ深い概念をつくりあげることも、論理にあった（すなわちロジカルな）結論をひきだすこともできない。」

感性的段階ではまちがうことも多い、そこで止まってはならない、と、毛さんは言うわけです。「まちがっているとは思えない」などと言ってはいけないのです。ではどうするのか。

「社会的実践の継続によって、人びとに実践のなかで感覚と印象をひきおこさせるものが何回となくくりかえされると、人びとの頭脳のなかで、認識過程における質的激変（すなわち飛躍）がおこり、概念がうまれる。」

ふむ、なるほど、などと思った人は、"科学的思考"のできない人です。感性的認識をくりかえしただけで、頭脳が「質的激変」して「飛躍」する、などということは、お話しであって"科学"ではない、と、たいていの大学教授は言われることでしょう。どういう機構で頭脳が飛躍するのか、それを調べて明らかにすることこそ"科学"である。でも、残念ながら毛沢東は、「飛躍」の機構などそ知らぬ顔で、次の段階に進んでしまいます。

「概念というものは、もはや事物の現象でもなく、事物のそれぞれの一面でもなく、それらの外部的なつながりでもなくて、事物の本質、事物の全体、事物の内部的なつながりをとらえたものである。 …… このような順序ですすみ、判断と推理の方法をつかっていけば、論理にあった結論をうみだすことができる。」

これを毛沢東は、「理性的認識」の段階とよびます。先ほどの、延安視察の例を使っての説明を聞いてみましょう。

「よそからきた視察団の諸氏が、いろいろの材料をあつめて、さらによく"考える"と、"共産党の抗日民族統一戦線政策は徹底しており、誠意があり、ほんものである"という判断をくだすことができる。 …… かれらは一歩すすんで"抗日民族統一戦線は

成功する”という結論をくだすことができるようになる。」

いささか我田引水的な「判断」と「結論」ですが、それはまあ一応置くとしても、「突然の飛躍」などにたよっていたら、同じ経験をしても反対の結論、「抗日民族統一戦線は失敗する」と「飛躍」する人だっているでしょう。人によって飛躍の仕方が違っては、やはり“科学的”とは言えますまい。

ところで、話は突然に飛躍しますが、当時日本には、武谷三男なる若き物理学者がおりまして、当局の目をぬすみながら、良からぬことを考えておりました。そのころは、頭の中を撮影するレントゲン写真はなかったので、いまでもまだないようですが、口に出したり書いたりさえしなければ、さすがの特高警察といえども、つかまえるわけにはいかなかったのです。武谷氏は、何を言ってもつかまらぬようになった戦後、その良からぬ考えを公表しました。戦後の物理学をはじめ、すべての自然科学の指導的方法論としてもてはやされた、「武谷三段階論」なるものがそれです。

これもまた、一種の認識論なのですが、毛さんのが感性的・理性的の二段階だったのにくらべて、こちらはその名のとおり三段階あります。現象論・実体論・本質論の三つです。このうち、感性的段階と現象論、理性的段階と本質論は、だいたい同じ内容ですから、実体論段階というのを一つ余計につけ加えたわけです。そして、これこそ、毛沢東が「突然の飛躍」といってごまかしたものを、“科学的”に明きらかにしたものなのです。

科学者といえども、まず見るのは、ものごとの現象にすぎません。でも、現象を注意深く見ていくと、現象と現象との間に、かくされてはいるが何かのつながりがあるらしいことがわかります。そこで、「実験」をしてみるのです。春になるとサクラがさき、ウグイスがなく――ウグイスはウメだったかな――。これはどうも気温の上昇とつながりがあるらしい。そこで、サクラとウグイスを温室にとじこめてみると、正月にサクラがさいてウグイスがないた――実際には、サクラは枯れてウグイスは昇天しますが――、となれば、そのつながりは証明されたわけです。

こうして、毛沢東の認識論を上まわる武谷認識論が日本で生まれた。私たちは若いころ、おおかたわからぬくせに、武谷三段階論を生かじりして、得意になっていたものです。でも、その後、この三段階論が、だんだんうとましくなってきました。その原因は、毛沢東を越えたはずの「実体論」にあったのです。

実体論は、金がかかります。現象論ならながめていればいいのだし、本質論は頭を使えばすみます。でも、実体論はそうはいかないのです。山へいくと、鳥はとんでいるし、カエルは泳いでいるし、クマは歩いているし、ミミズははっています。自然には、何百何千何万という生き物がいて、それぞれがつながりあっています。それを、一つ一つ実験して、一つ一つ証明していくのは、たしかにそれが“科学”というものではありますが、あまりにも金がかかりすぎるのです。

もうひとつ、実体論は時間がかかります。まあ、科学の研究などというものは、時間がかかろうが、結局はできなかろうが、大したことはない、あるいはその方が世のため人のためになる、ような

ものですが、社会生活の中では、一瞬のおくれが命とりになることもあります。のんびり実験などやってるひまはなさそうです。

毛沢東は「実践論」を、延安のほら穴の中で書きました。紅軍、のちの中国人民解放軍、は疲れきり、一方日本帝国主義は、すでに中国東北地区を手中におさめ、中国全土をも手に入れようと、すきをうかがっている状態。とうてい、ヒマとカネがあったものとは思えません。しかし、正しい認識に達する必要は絶対にあったのです。「突然の飛躍」以外に、その道があったでしょうか。

それにしても、突然の飛躍だけでは、まちがうおそれは、どうしてもこります。実は、毛沢東は、それがまちがうことを前提にして、考えていたのです。

> 「ある事物、もしくはあるいくつかの事物を直接に認識しようとするには、現実を変革し、ある事物もしくはあるいくつかの事物を変革する実践的闘争にみずから参加しないかぎり、その事物もしくはそれらの事物の現象にふれることができないし、その事物もしくはそれらの事物の本質をあばきだし、それらを理解することができない。…… 梨の味を知りたければ、梨を変革すること、すなわち自分でそれを食べてみることである。」

魚のことが知りたければ、海へ潜れ、つかまえて食ってみろ。サルのことが知りたければ、山へ登れ、つかまえて食ってみろ。ムカデのことが知りたければ、ごみ捨て場をかきわけろ、つかまえて食ってしまえ――私は、ムカデのことは知りたくない。松阪牛のことなら大いに知りたい――、というようなわけです。社会のことが知りたかったら、会社へはいって働いてみろ、そしてストライキでもやれば、会社の「本質」がわかる。１０年前の全国学園闘争なるものは、多くの学生が、大学をつかまえて食ってみたわけですが、大学の「本質」はくさっていたとみえて、多くの学生は“食中毒”をおこしてしまったようです。そして大学を去っていきました。当らなかった、胃腸の丈夫な人だけ大学に残っているようです。

我々凡人は、梨を食べても、大学を食べても、一度や二度では、その本質を理解することはできないようです。でも、気落ちすることはありません。指導者がまちがえば、部下に迷惑がおよびますが、凡人がまちがったところで大勢に影響はないからです。まあ、いずれはつかまえてやろう、と、のんびりいこうではありませんか。毛沢東だって、革命なんぞしていなかったら、しごくゆったり人生をおくったにちがいない人柄のようですから。

（野　良）

“手　記”　「ある生態学徒の堕落」　(3)

蜉　　蝣　　雲

大串先生との2回の団交を経て、私達は出口の見えないトンネルへ首をつっこんでしまった。四月、金沢へはるばる来た時から、ある程度計画していた研究の方も「ぼちぼち気合を入れなあかんなあ」と思いつつも、団交で大串さんが示した態度、「自然科学は必要か？」等々の反発が、何となくひっかかる。こんな基本的ともいえる問題にさえ、明確な自己の見解を持たずに「いっぱしの研究者になってやろう」などと思っていた自分自身が腹立たしいと共に、情けなくなってくる。それにしても、「白山調査に学生を連れていったのは、学生の教育のためだ」とか、「自然破壊のデータとなる証拠が必要だ」という大串教授の見解は、どうも単なる逃げ口上としか思えない。大体が「学生の教育のためだ」なんていわれても（内心うれしいような気もするが）、「本当かいな」という疑問の方が大きい。学生の教育のためなら別に白山での委託研究でなくてもよい。又、ゼミとか、生態の公けの場で主旨説明があってしかるべきであり、それがあたりまえだと思う。しかるに今回の白山の場合は、個々人に別々に「白山の調査があるから参加しませんか」という働きかけがあっただけであり、声かけられない人もたくさんいる。又、「自然保護の証拠となるデータを作る」に致っては、全くデタラメである。白山の調査を行なう過程でそのような話は、ただの一度も聞かされたことがない。そもそも調査の主旨さえも不明瞭なものであったし、調査自体もいいかげんなものであり、何ら目的のはっきりしたものではなかった（こんな内容で、ようやっとった）。それなのに、白山の自然破壊と白山調査が結びついたからといって、とってつけた様な理由を持ち出してくるとは、いかに私の信頼している大串先生でもあんまりや。かくのごとく、大串さんの態度に対する不満はつのる一方である。

しかしながら、2回目の団交が、大串さんにいいようにもてあそばれただけに、今後どの様な方向で大串さんを追及していったらいいのか、明るい見通しは見い出せないでいた。そこで、例によって世慣れた院生が登場する。「大串さんは、あんな評論家みたいなことばっかりいうとるけど、実際の大串さんの行動はどういうものなのか、再検討する必要がある」「大串さんの対応がこの様な形で出てきた以上、白山調査は是か非か、自然保護がどうのこうのという所では解決しない」とおっしゃる。

そうはいうても、生態懇談会の内部では、依前として、「大串さんが白山調査に参加したのはおかしかった。県のやり方は不当である」というてくれたらそれですむ問題や、と思っている人の方が多かった。又、学生の労力を大串さんが利用する事に対しては、私を含めて、「そんなに悪く考えることない、大串さんは学生がいなくても、一人でやる意志があるだろう、そのくらいの心構えは持ってるはずや」と思っていた。　　これは、後にそうでない事がわかる。学生が大串さんの委託研究から手を引いてしまってからは、白山調査は中断されたままである（最近また、学生を大量動員してやってるという“うわさ”もある。こんどはどんな口実でやっているのでしょう？）

私達としては、大串さんとの団交の中で、たとえ不充分であっても我々の批判をぶっつけてゆくことが、問題の解決の最良の方法であると思っていたが、大串さんの都合で団交が組めなかったので、とりあえず質問状を出すことにした。内容は、次の様なものであった。

「大串先生

2月21日の生態院生・学生懇談会で白山調査の問題が議論され、次の事が決まりました。

1月25日の大串先生との討論会で確認された事項、すなわち“北国新聞の記事内容については、次の自然保護センターの会合（調査会の会合）で、撤回させるような方向で話をする。拒否された場合は、こん虫班としての声明を出す”に基づいて、大串先生はこん虫班としての立場から話をされると思います。それ故、大串先生のその会合でとられる立場（＝こん虫班声明）を、我々に提示していただきたい。　……後略……

1973年2月21日　　生態院生・学生一同」

これに対する回答は、

「白山調査団の件につきましては現在、つぎのような方針でゆきたいと考えています。

1　次回の調査団総会までに、できるだけ多くのメンバーと話しあい、その意見も……聞きながら総会に、つぎのような統一見解の案を出して、決定公表するように働らきかける。

2　案の大要：調査団が現在おこなっている調査は、白山の貴重な自然とそこにのこる文化を明らかにして、これを我々みんなのものとして残してゆくためのものであって、それが現在おこなわれている自然と文化遺産の破壊と消滅を合理化するためのものではない。近ごろ、県や報導機関の発言の中に、この調査によってスーパー林道等の自然破壊が解消されるかのような印象を与えているものがあるが、これは調査団のめざす所と逆行するものであって、調査団は今後もこれらの自然と文化の破壊、変容に注意し、警告してゆきたい。」

（注：署名、日付なし）

大串さんの回答には、「北国新聞の内容を撤回させる」という、強い方向性は感じられない。それと同時に、白山調査自体が持つ意味（自然保護行政の一環としてあるということ）を認めようとせず、そのような行政うんぬんとは全くかかわりのない、自然や文化を守る純粋な調査であると強調する。しかし私達は、大串さんがいくら強調しても、ふんわかとした夢をいだいて白山調査に参加した時の様に、すなおに信用しない程度には、堕落していた。

こうなってみると、大串さんへの追及はどっかへ飛んでいって、問題は調査団の方へ広がってしまう。大串さんは全然反省すべきことがないのに、私達と同じ立場で、むしろ私達の代表として、敵は県庁になっている。どうもこの白山問題の過程で私達は、我々の「自己批判」に忙しすぎて、大串さんへの対策を考える暇がなかった様だ。「このままじゃあ、あかん！」この何とも焦点のぼやけたぬるま湯のような状態は、何とかせなあかん、と思った次第。

＜小笠原問題＞

大串先生は、前にも書いたとおり、学生の面倒をよくみてくれるいい先生であった。その大串さんのこれまでの行動を再検討しても、別段大した問題は出てこないと思うけど、院生の言葉には何となく説得力があるし、自信もありげに感じられた。そして私自身はというと、白山問題で右往左往しながらも、大串先生に対する疑問は次第に大きくなっていた。そして何よりも、良い先生大串さんの意に沿って行動してきたが故に、現在のわけのわからない問題が現われてきたという事実がある。

そこで先ず取り上げられたのは、「小笠原のアルバイト」の件であった。

これは、そのころ、アメリカさんから日本へ帰ってきた小笠原諸島において、ある研究グループが東京都より、ミカンの害虫であるミカンコミバエの防除の研究を委託されたことにはじまる。その研究グループの指導者と大串先生とは交友があったのだが、その一環として大串教授を通じて、生態の学生が小笠原へ、アルバイトとして送られた。そして現地では、個体群生態学のゼミを行なうなど単なるアルバイトではなく、かなり自発的な労働力であることが要求された。これには2人の学生が参加じた。

「小笠原！」　なんともエーひびきやなあ――。そのころは沖縄はまだ帰っとらんかったので、水生こん虫の美しさに魅せられる前の、潜りが好きだったころの私には、あこがれの地であって、実はそれには一つの理由もあったのである。

私が大学3年のころのことだが、水産学部では3年生になると、"遠洋航海"という実習があり、私のいた増殖学科ではこれまで例年、あま美大島で行なわれていた。我々の3年生のとき、ちょうど小笠原が日本に復帰したのである。小笠原ゆうたら、皆さん知ってますか？　日本の最南端でっせ！（そのころの）　あま美大島よりも、300キロメートルも南にあるんです。見たことない様な魚や

動物がうじゃうじゃおる。「ここはひとつ、小笠原に行こうやないか」ということで、クラスの意見をまとめ、学部長に交渉にいった。「学部長さん、小笠原へ連れてって！遠航はぜひ小笠原にしましょう！」と、小さな声で叫んだ。結果はもちろん、「バカタレ！金がかかりすぎるからダメ！」でおしまい。

その小笠原へ、なんと、ただで行けてやで、おまけにバイト付きや。そのバイトも、私がいつもやっていた道路工事や打壊し（これは適当な運動と破壊欲を満たしてくれるので、非常に楽しかった。ぜひ皆さんにも、一度はやってもらいたい、とりわけ青い顔して研究室にこもっている学生さんにはおすすめしたい）とはちがうんや、研究のお手伝いや、こりゃ後先見ずフラフラ〜とならん方がおかしい。

私も行きとうてたまらんかったけど、なんちゅうても新参者やし、大串さんから話を聞いた4年生達でさっさと定員の3人を決めてしまいよった。私はただ、指をくわえて見つめるだけだった。非常につらい思いをしたことが、今でもよみがえってくる。

これも、どうやら委託研究がからんでいるらしい。しかし、大串さんは直接は参加していないらしい。ほな、なんではるばる金沢から学生が行かなあかんねん。単純にアルバイトならだれでも良え、本土から連れて行かんでも、現地の子供でも良えと思うけど。

なんとなく、取り引きのにおいがする。金沢大学にいる大串さんは、現場の研究者である小笠原の人との連ながりを保つことが出来る。小笠原の人にしても、大学の教授である大串さんとの連ながりを持つことが出来る。（簡単にアルバイトの学生が集まる）　学生にしても、大串さんとの連ながりと同時に、小笠原へ行ける。単純にみると、三方まるくおさまるという理想の構図であるのだが、後に出てくる金沢大学生物学科教官選考基準の「テーマの自由」のうち、「学生を技術助手として使わない」を破っているようである。

＜三井問題＞

もうひとつあった。「三井の野ウサギ調査」に関してである。少々長くなるが、そのあらましをながめてみよう。

この研究の存在を我々が知るきっかけとなったのは、１０月の生態学ゼミナール（当時は生態学講座の全員が出席して行なわれていた。しかし、この後１９７３年になって、５月２６日の大串主任教授による“教室会議解散”に抗議しての、６月２１・２８日・７月５日の３回にわたるゼミボイコット、６月２７日〜９月１日までの大串教授の長期逃亡―― どういうわけか学校に出て来られなかったのです ―― をはさみ、その後数年にわたり、大串教授の単なる身勝手としか思えない理由で、生態学ゼミナールは開講されなかった。いまも開かれていないらしい）が終ってから、ある学生が「能

登・三井でノウサギの調査を行なっているのだが、冬季のノウサギの調査の為の簡単な小屋を建てたい。皆さん、その建設に協力してほしい」という提案がなされた時である。

この提案そのものに対しては、

1) 能登は遠い、車で3時間もかかる、特に三井の山中ではバスも通っていない。

2) 予算が5万ということだが、その程度の金額で建つ小屋では、雪の多い能登の山中ではっぷれてしまう。(もっとも、加賀の平野部でも同じであるが)

3) 実際に建てるとなると、かなりの人員を必要とする。そんなに学生を使うことをどう考えているのか。

4) (大串教授に対して)雪を知らない無知からくるのか、学生の野外調査における危険についての配慮に欠けている、という指摘がなされた。

等々の反論が出た。結局は、技術的にも現実的にも不可能ということで、この話は御破算になった。しかし、我々にとっては、大串先生の姿勢に対して、多くの疑問をいだかせる問題であった。

この三井の件は、よく聞いてみると、怪しげな話がいっぱい出てくる。とにかくこの学生が、三井でノウサギを研究する様になった経過を、当の学生が後の1973年4月に公表した「課題研究について」という文書からみてみよう。(一部要約する)

1 3年生ごろから、mammalの生態をやりたいと思っていた。

2 3年生の9月、大串研究室に出入りする様になり、主に mammal の話をする。

3 ◎ 1月、大串さんから「ノウサギ」はどうかといわれた。

◎ ノウサギの生態は、popular なわりにはあまりわかっていない。

◎ 生態の研究は、1年でやろうとする場合、4月がらテーマを考え始めるのでは遅い。

◎ 京大の学生にもノウサギをやりたがっている人がいて、field を探している。

◎ 大串さんからは、たとえ共同研究の型にならなくても、研究者が互いに連絡をとりあうことは必要なことであると言われていたので、3月に一応、京大の学生と予備調査に、能登・三井(ウサギが多い)へ行くことにした。

4 2月、大串教授と新潟へ行く。そこでノウサギの目立った研究者を紹介してもらった。(エーなあ)

5 3月、三井で京大生4人と予備調査を行なう。この時、ここでいっしょにやろうと決心する。行動の調査はむつかしいので、夏でもできるフンの調査からはじめようと考えた。

京大生の方は、私の方で研究をやる意志があるのなら、いっしょにやっていこう、というものであった。

6 4月、予備調査の後、大串さんより委託研究の話があった。それは、県の鳥獣審議会(大串さんは委員)から、ノウサギの生態の調査を引き受けているので、そのお金を君のノウサギの研

究に使ったらどうですか、と言われた。一応は京大の学生の交通費にします、とのことであった。

鳥獣審議会からは年間3万円の研究費が出、調査の目的はノウサギの害を防ぐためのもので特に明確な指示はない。但し、3月（翌年）には報告の義務がある。

7　5月、三井へ行くことにしたが、一人では無理なので、3年生を誘って来てもらう。大串さんは常々、生態の研究は手のあいている人が互いに助け合って行くべきである、そして、今の生態講座のやり方にはいつか限界がくる、とも言っていた。
この期間中大串さんも来て、輪島と三井の林業事務所へ行き、造林地を使わせてもらうこととや、調査の主旨を話してきた。

8　6月、野兎研究会に入る。

9　7月、京大の学生1人（他の学生は、本来の自分達の研究であるカマキリから手がはなせない）と、1年生を誘っていった。

＜三井調査における問題点＞

三井の件には、多くの問題点が集約されていた。

1　その一つが、"テーマの自由"の侵害である。

金沢大学理学部生物学科には、世にも珍しい「教官の選考基準」なるものがあった。これは、生態学講座新設に伴なう教官選考の際、当時の院生会（大学院生でつくっていた会議）の、「人事は、公開・公募・明確な選考基準、で行なうべきである」という批判を受けて、生物学科教室会議が決めたものである。当然、大串教授はもちろん、奥野助教授も、その基準に沿って選考された。そして、当然のことながら、これを定めた生物学科の教官は、それに沿うよう努力しなければならないことになっていた。

その内容は、次の三本の柱からなる。

（研究面）　その分野についての体系づけをし、その研究の位置づけをしている。

（教育面）　個人を尊重し、生物学の研究を通してその個人を開発する。即ち、あらゆる面において学生の自主性を重んじ学生を主体性を持った研究者とみなして教育する。

（管理運営面）　大学の全構成員である教官、事務職員、学生が、それぞれ管理運営に関する意見を述べる権利を認め、上述のような研究教育がおこなわれるように民主的に管理運営する。

それぞれに細項（イメージアップされた事柄）がつけられているが、ここでは教育面の「テーマの自由」に関する部分だけをみてみる。

I　学生を技術助手として扱わない。

II　あらゆる面において学生の自主性を重んじ、学生を主体性を持った研究者とみなして教育する。

テーマの決定に関しては学生の主張を受け入れる。

研究テーマについて学生の自主的意見を尊重する。

学生が独自に研究できるような考え方見方を学生との相互批判によって追究していく。

テーマ決定後は充分に学生と討論助言する。

この様な内容の選考基準は、簡単に決められた訳ではなく、当時の院生・学生のねばり強い相互批判と闘いの中でかち取られたものであるが、私が金沢へ来る以前のことなのでここでは述べない。くわしく知りたい方は、「生物科大学院会活動の記録：１９７０年２月～１９７１年３月」および、「“学生の研究テーマの自由、院生修士論文審査問題”についての資料：１９７２年１２月」を参照されたい。

生物学科の教官である大串教授は、このことを充分承知していたはずである。ところが、前出のとおり、この学生が「三井のノウサギ」を選ぶまでの過程をみると、明らかにテーマの自由を侵害している。たしかに、外見的には学生が自主的に決定した様にみえる。学生も「自分で決めた」と思っている。しかし実際は、前もって存在する“ノウサギの調査”という委託研究の中に、学生のテーマをはめこんでいったことは、疑いのないことである。

２　もう一つは、共同研究、とりわけ教官との共同研究の問題である。

この研究は、単純にはその学生の自主的研究であるはずだが、鳥獣審議会からの委託研究をやる以上、委託されたのは大串教授であり（その金を受けとるのは京大生だが）、学生ではない。いやおうなく大串教授との共同研究を行なっていることになる。教官と学生との共同研究には様々な問題があるが、その関係は大体、教官が主であり学生は従である。色々な形で教官の干渉を受けることとなるし、大串教授業績づくりに学生が一役買うことになる。

３　もう一つの共同研究。

三井の研究にはどういう訳か、あの現在の生態学を牛耳っているところの京都大学の学生が入りこんでいる。

（私の発想からこの点を考えると）

京都大学の学生（３人はマスター）といっしょに研究ができるなんて、なんと幸福なことなのでしょう、大体が、学生が他の研究者と一諸にやろうと思っていても、そう簡単に出来るものではない。意見の交換をするだけでも、普通の学生に出来ることはまれである。それが、大串さんのおぜんだてで苦もなく出来る。又、大日本帝国の京都大学と、加賀百万石の金沢大学とでは、そこに何とも言えないギャップがある。京大の学生であるから入りこんできても、歓迎こそすれ追い返す様なことはし

ない。これが、そのへんにゴロゴロしている私立大だったとしたら、そうはいかないでしょう。――私の心の中に巣喰っている陰湿な差別意識のあらわれでしょうか。社会一般が規定したランクの中に自分自身を置いて物事を考えることからくる、ひがみと優越感が共存しているのでしょう。――

それはあまり深く考えないで置いとくとして、ここに出てくる京大生の方も、相当なもんである。出合いは、大串さんの紹介であろうと、まあかまわんけれど、その後の行動、考え方のいいかげんさといったら、あきれる。何んでか知らんけどウサギがやりたいから、「君がやる気があるんなら一諸にやろう」、5月に調査に行こうと言ったら「個体群生態学会があるので、その準備に忙しいから行けない」、7月に行こうというと「本来のカマキリが忙しいので行けない」、10月にそのうちの1人の学生が来て、「冬の調査をするなら山小屋は必要だ」とはいうけれど、具体的に建設に参加する気は毛頭ないらしい（1973年4月文書）。しかし旅費だけはもらう。結局のところ京大生は、毎回重い荷物を運ぶことなく、いつでも気軽に行けて、手軽に調査ができる場所、山小屋（基地）がほしかったのではなかろうか。

10月、山小屋の建設を断念して後、この学生は委託研究の問題性に気づき、三井から手を引き、金沢近郊の内灘丘陵地でノウサギの研究を続けることにしたが、その時大串さんは「三井の方は京大の連中と私とでやり、県庁へ結果を報告する」（前出文書）といったそうであるが、その後調査を行なったという話はきかない。

それにしても、大串教授は、委託研究の金をそっくり京大生の旅費に使ってまで、何故に京大生を連れて来る必要があったのだろうか。全く不可解である。ひょっとしたら、京大生を使って、この学生に個体群生態学の調査方法でも伝授させるつもりでもあったのだろうか。京大生が大串さんに近づく理由の方は、なんとなくわかる様な気がする。

4　学生（1年生とか3年生とか）を使うこと。

これには学生側の問題点もあるのだが、大串教授の働きかけなしには行なえないものであることは確かであろう。大串教授は、白山調査にも1年生を動員した。大串教授は、この様に1年生あるいは2年生（つまり予備軍）の育成にかなり気を配っている（いい先生である）。もちろん「学生の教育のため」である。しかし、本当にそれだけなのだろうか。「生態の研究は、手のあいている人が互いに助け合って行くべきである」という大串教授の言葉にも見られる様に、今の科学、特に生態学は多くの人手を要する。又そうでなくても教授にとって学生は、貴重な存在である。大串研究室が発展するかしないかは、ひとえに有能な学生（使える学生）が何人いるかにかかっているからではないのだろうか。そして、もう一つ重要な点は、1年生とか2年生とかの場合は、前に出てきた「選考基準」の「テーマの自由」にもふれないし、学生を技術助手として使ってもあまり文句は出そうにない。

5　委託研究の問題。

委託研究に関しては、第2回の団交でも議論された点である。その時大串教授は、次の様に述べている。

(大串) 自分の好きな研究と、社会からの要請のある研究と、一致するよう努めてきた。

(学生) それなら委託されてからでなく、その前に自主的にやるべきではないか。

(大串) その通りだ。広い意味で役に立つと考えていなかったらやっていけない。長崎県の農業センターにとび込んだのも、直接自分の役に立っている事を見たかったからだ。

(学生) 県から金をもらって、自然保護ができるのか。例えば、米国陸軍の研究資金の問題をどう考えるか。

(大串) それは昔話し合ったが、次の三つの立場がある。

イ) すべてが米国の世界政策にかかわるものだからダメ。

ロ) 科学者は本当に自分が必要と思う事をすべきで、委託をこえてやるべきである。

ハ) 米国がダメなら、中国もダメ、ソ連もダメ、そして日本政府もダメという事になる。だから内容を考えて case by case でやるべきである。

私はハ) の立場をとる。ベトナムの破壊調査はアメリカの科学者がやっているが、もともとは民間資本だが、米軍の協力を得ないとやれない。

(学生) 今回の調査 (白山調査) の意図は明らかである。

(大串) 自然保護行政自体は悪いとは思わない。良い面も悪い面もある。悪い面だけを見るべきでない。環境庁もつぶせという事か。

(学生) 自分の研究と自然保護とは違うのではないか。白山という場を、自分の研究に利用しているのではないか。

(大串) 他の人 (＝調査団の他のメンバー) は感じていないのではないか。わかっていれば十分に問題になる。

(学生) 昔と今では、調査そのものが持つ意味が違っている。昔は、研究者が自分の研究のために県に金を出させるといった状況だったが、今は、調査そのものが県の自然保護行政に必要だから、県でやるのではないか。

(大串) 自然保護センターが出来た段階で変ると思う。しかし、放っておくとどの方向に進むかわからないので、監視してゆかねばならない。今私はぬけるわけにゆかない。

大串教授はとにかく、出来る限り多くの人 (機関) に顔をつないでおく、石川県、白山調査団、小笠原の人、鳥獣審議会、京都大学、そしてその関係を密にする事によって、委託研究の口をみつけてくる。大学から出る研究費は現金として使うことは出来ない (少額の旅費を除いて) ので、当然、食事、宿泊その他は自前で補なわなければならない。そこで委託研究がありがた味を増すわけである。委託研究の金は、これまでみた通り、金の使い途は全く自由である。何に使っても良い。学生を使う場合 (アルバイト) にも、金は不可欠である。(なかには気のいい学生も居て、自腹を切ってでも参

加する人もいる)　学生は（学生に限らないが）、名声（末は博士か大臣か）にも弱いが、金にはすこぶる弱い。そしてもっと弱いものがある、それは就職先である。大串教授の顔つなぎは、この点も大きな要因であろうと思う。関係を密にしておけば、そのうち学生の一人くらい就職させる事が出来るかもしれない（事実２人ほど就職している）。――そうすれば大串さんの大学内での評価は高まる。「大串さんの研究室へ行けば就職の心配はない」という事にでもなれば、これはもう、理想の姿！「大串さんに就職の世話をしてほしかったら、おとなしくしてなあかん」　一方大串さんにしてみれば、「こんだけのエサを見せてもついてこん奴は、いらん子や、“テーマの自由”とやらを認めてやって、ほったらかしにしとけばよい」ということになる。

委託研究にはもう一つ、特別大サービスのおまけがついている。それは、「業績」である。本当はおまけではなく、これが目的なのかもしれないが。委託研究、特に官公庁からの委託の場合、そのデータは大体、研究者が自由に発表してもよい、つまり委託研究を一つひきうけると最低一つは論文が書ける。学生をたくさん使って色々区分けした場合、学生の名前の後に教授の名前もつけて、学生の頭数だけ論文が書ける。業績の数がその研究者の価値を決める現在の日本では、こんな結構なことはない。又、官公庁の委託の場合、新聞に載ることも多く、名声（?）も得ることができる。北国新聞には時々大串教授の名が出てくる。

では、官公庁の方は一体委託研究によって何を得るのかというと、データそのものを必要とする場合もあるが、調査をやっているという事実がほしい場合が多い。それはすでに述べたごとく、白山調査もそうだったし、三井のノウサギの調査でも、県内のある村の農民がノウサギの害の対策を陳情したとき、「金沢大学で今その調査を行なっている」と、農民を追い返すのに使われていたことが、後になって明らかとなった。

＜第三回大串団交＞

小笠原問題、三井問題を検討して、大串教授の反発を打ち破る糸口が見つかったようである。何となく勇気がわいてくる。「今までとは、ちょいと違いまっせ!」という意気込みだけは勇しく、１９７３年3月１１日、３回目の団交にのぞんだ。

(大串) いくら自然保護が大切だといっても、地域住民の生活を重視すべきであり、優先すべきである。

(学生) 白山山ろくだけが過疎で苦しんでいる訳ではない。県内の他の地域でもっと早くから、過疎化や産業の不振で、人の全くいなくなった村がある。これらの所が見すてられて、どうして白山のスーパー林道が、地域住民のために作られている、などといえる。県が本当にその様な事を考えていると言えるのか。

―― これに対する大串教授の反論なし ――

(学生) 小笠原はアルバイトか委託研究か。

(大串) アルバイトだ。

(学生) 単なるアルバイトではない。大串教授の言うような「あるテーマが決められていて、その一部を請け負うのがアルバイトだというなら、ほとんどの大学の研究室では助手、学生がその形をとらされているので、これもアルバイトと呼ぶべきである。

(大串) 4年生から小笠原へ行きたいという希望を以前から聞いており、これを4年生の部屋で話した。こうすれば自然に皆に知れると思った。

(学生) ゼミの時や掲示で主旨を明確にし、かつ機会を均等に与えるべきだ。この様な不平等は他の教室ではしばしば行なわれ、露骨な差別を行なっている。このような意図はたとえないにしても、形の上で同じことをやったのは問題である。また4年生のある者に話せば全員に伝わるという考えは、権力の押しつけのあらわれである。また、教官として怠慢である。

―― これについては、今後は公けの場に公表することを約束する ――

(学生) 何のために持ち込んだのか。

(大串) 学生の希望と、そしてこのような機会は学生の体験を増すうえで有意義と考え、その指導については、現地の人を信頼している。

(学生) 現地の人を信頼するかどうかは学生が決めることだ。有意義かどうかは、A君はそれほど感じていないようだ。

(学生) 三井調査は委託研究かどうか。

(大串) 委託研究ではない。C君は県とは関係ない。(この時はすでに三井をとりやめた後だった)

(学生=C君) 最初から県との関係の中で仕事を始めたのであり、自分が県と関係がなくなったのは10月からである。(これには、大串教授も認めざるを得なかった)

(学生) なぜこのような課題を持ってきたのか。

(大串) 三井はフィールドとしては環境がよかったし、また対象とする動物も、ウサギやムクドリの害が問題としてとり上げられるので、ウサギがよいと思った。三井は県有林なので報告の必要があった。許可証も県の仕事をしていれば得やすい。

(学生) 報告の義務は学生には負担だった。また、観察に適した場所を探していたら三井になったというのではなく、はじめから三井に決まっていたのはおかしい。

(学生) 委託研究には、前回の団交でも述べたとおり、様々な問題がある。大串さんがやる事も問題だとは思うが、今後学生には持ち込まないでもらいたい。

（大串）わかりました。しかし内容を理解してもらえれば協力してほしい。

始め考えていた事の半分も言わないうちに終ってしまった。団交＝話し合いの難しさを痛感させられた団交であった。問題点がわかるということと、相手（大串）に理解させるということは、全く別問題である。ただ、この団交での確認された点、「バイトその他は公開の場で明らかにする」「委託研究を少なくとも学生には持ち込まない」は、大串教授のこれからの生態講座における活動に、ある程度の歯止めとなり得ると思う。その意味で私などは、まずまずの成果を得られたと感じていた。しかし、このことに関しても一部の人は、「機会均等の約束をさせたことは、さほどの成果とは思えない。あっせんによる学生の差別はいく分やりにくくなるだろうが、学生全体をふぬけにすることが可能になる。また、委託研究の合理化の場として使われる恐れもある。だから、これからは一つ一つに対して、常に注意を払っていかねばならない」という見解をとっていた。まだまだ私には、教官（大串教授）に対する信頼感が残っていたようである。

三井の問題にせよ、小笠原問題にせよ、何とも精彩を欠く団交となってしまった。この原因の一つには、その問題の直接の当事者たちが、あまり大串教授を追及しなかったせいもあるが、我々生態懇談会全体としても、「委託研究」「テーマの自由」「学生と教官の関係」等々について、論理的にはは握しえても、問題の本質を完全には理解していなかった為であろう。これまでの団交と同様、表面的な事実関係の確認の域を出ておらず、掘り下げた追及は行ないえなかった。それは、一方に教室会議はちゃんと存在し、選考基準は守られるべきものとしての一定の拘束力を持っていた。だから、個別的に大串教授による「テーマの自由」の侵害がなされてはいても、直接我々の「テーマの自由」が否定された訳ではなかった（本当は否定されていた。なぜなら、「テーマの自由」は、本当は教官の姿勢を規定したものだからである）。我々は、「テーマの自由」の上にあぐらをかいていればよかった。しかし、この事は後の「5・26大串発言」によって、否や応なく、我々自身問いつめざるを得なくなっていく。

残された問題は数多くあり、団交において大串教授を追いこむことは出来なかったけれど、春先き、大串教授の部屋でコーヒーを飲んでいた時には見えなかった、大串教授の実像がしだいにはっきりしてきた。逆に、真面目な人間の階段は、はるかかなたに。

ついこないだまでは、その返にあったのだけど、何時見えなくなったのか、さっぱりわからん。今は、若干の気恥しさとともに、懐かしい気がするだけである。

（つづく）

??? 書　評 ???

「わが聲は犬のごときものである」　なだ いなだ 著　平凡社　900円

古代の世界には二つの断絶があった。一つは地上界と天上界（すなわち月より外の世界）との断絶で、これはガリレオ、ニュートンなどによってうめられた。もう一つは人間とその他の生物との間のもので、これはダーウインによって埋められた。以来、人間と他の動物達との共通性は強調されつづけてきたが、今日動物行動学者（エソロジスト）達は、動物の行動と人間の行動との同一性を強調しつつある。いや、それ以上に同一であるとみなしてしまっているようでもある。

この著者は、人間は「犬のごときもの」ではあるが「犬」ではないこと、また「犬」は人間ではないし「人間のごときもの」でもないことを明確に示す。人間と動物とを「同一視」することはできない。人間と動物との間には「人間の厚い文化の層」が横たわっている。人間は、当然ながら人間社会に生きており、その行動は、動物の行動がその各々の動物の生きる世界で意味があるように、人間の社会の中で意味を持っている。たとえ、人間のある行動の出現機構が、動物の行動の出現機構と同一であると見える場合であっても、動物の生きる世界と人間の生きる社会とでは、おのずと行動の意味は異なるのであり、また人間の社会の内でも、その人間の存在する位置によってもまた意味が異なる。というわけである。[1)]

比較とは同異を明らかにするものである。何が共通で何が異なるか、そのちがいはどういう意味を持つのか、を明らかにするものである。「犬のごときもの」であることと、「犬」であることとを明確に区別せず、同一視したり、あいまいにするものは、研究者ならぬ「研究者のごときもの」と言うべきであろうか。

今日の行動学者達は、動物の行動と人間の行動との一すじの共通性を見出したことに気をよくしすぎて、「文化の層」を忘れてしまっているようだ。[2)]

1）この著書は以上のように、今までの多くの行動学の書とは異なり人間と動物の同異を明確におさえている。

2）今まで、人間と動物との同一視が強調されすぎた。今は再度、ちがいを強調する時かもしれない。

（チ　ヒ）

書評特集

奥野良之助著　「生態学入門――その歴史と現状批判」　創元社　1978

編集局から

当会会長奥野氏は、昨年、あれほど「生物学会誌」に書きまくったにもかかわらず、なお書き足りなかったとみえて、「生態学入門」なる怪しげな書物まで書きました。ところが、あろうことかあるまいことか、朝日・毎日・読売という三大紙をはじめ、新聞・雑誌にたくさんとりあげられ、しかもその上、信じられないことに、おおむね好評ばかりという、うれうべき事態に立ち至っております。会長の不真面目さ、いかげんさをよく知る学会員にとっては、これは由々しき状態です。たださえおっちょこちょいの会長が、ほめられていい気になって浮かれ出し、これ以上ワルノリしはじめたら迷惑をこうむるのは我々学会員であることは、火を見るよりも明らかでありましょう。そこで、ここらでひとつ、おキュウをすえておく必要があると思います。幸い、ひとつ書評が来ました。でも、やはり批判の仕方が手ぬるいようです。このさいですから、手段は問いません。あげ足をとろうが、だましうちにしようがかまいませんから、どしどし悪口的書評をおよせ下さい。

書　　評　　その 1

入門書というものは大変つまらない事が多い。それは、教科書的な公式が、その導き出されてくる過程を抜きにしてら列され、大変無味乾燥で難解な解説がつけ加えられている事が多いからである。しかし、この、奥野の「生態学入門」は大変面白くてわかりやすい。私は生態学に関しては全くの門外漢であって、生態学とは生き物とその環境との関係を明らかにして行く学問、という程度のぱく然としてはなはだ幼稚な認識しか持っていなかった。だが、この書物を読んで、生態学とはどんな学問であるのか、かなりよくわかったような気がする。近年、いわゆる「環境問題」に関連して研究費がたくさんバラまかれるようになり、生化学を専門領域として研究を楽しんでいる私の身辺からも、生化学と生態学とをつなげる体裁の仕事をする人が出てきたが、その中で、どういう仕事ならば「生態学的」といって差支えないのか、という事がおぼろげながらわかってきたような気がする。

この書物が何故そんなにわかりやすいか、というと、それが入門書としては型破りな事だけれども、生態学の主流の人々に対する批判の書として書かれ、その批判を通じて批判の対象となっている人々の仕事の性格も、また、批判者である奥野の主張も同時によくわかるように書かれているからであろう。著者の批判や主張に賛成するかしないかは別として、生態学における主要な概念をめぐる争点が明快に述べられているという事が、読者にとっては大変有り難い事なのである。

奥野が批判の対象としている概念は個体群と群集および生態系である。個体群とは、同じ種に属する個体の集まりの事だが、環境に向きあう生物主体としての個体群をどのようなものとしては握するか、という事が第一の点である。研究者が任意に切りとってきた地域内の同種の個体の集まりではなくて、「種、もしくはその内部構造としての生活の単位集団として規定」せよ、というのが奥野の考えである。この考えによれば、例えば「水田一枚」とか特定の林とか、研究者の主観によって切りとった地域の中に限定して、その中に住んでいる同種の個体の集まりを個体群として、環境に向きあう主体として扱うのは間違いで、自然に形成された生活単位に見合う個体群を、環境に向きあう主体として扱わねばならない、というのである。

いくつかの個体群の集まりによって構成される群集を、統一性ある有機体とみなして、環境の主体と認めるかどうか、が第二の争点である。そして、この群集の概念をめぐる奥野と主流派との考えのちがいを明らかにする事に、この書物はかなりのページを使っている。エルトン以降の生態学には群集有機体観と群集個別観の二つの流れがあってそれが対立しているけれども現在は前者が有力で日の当る場所にいるという。奥野はいうまでもなく、群集個別論者であって、いわば日の当らないアウトサイダーとして前者を批判しているのである。

群集有機体説を批判した奥野は、更に筆を進めて、生態系生態学者を徹底的に批判する。群集に無機的環境をもとりこんで生態系という概念をつくり、生態系を一つの有機的統一体とみなしてシステム工学的に、生態系の「構成要素」としての個体群の盛衰、生態系全体を通しての物質循環とエネルギー流転を分析するのが、生態系生態学であるらしいが、オダムに代表されるこういう生態学は結局生物不在の生態学であって不毛であるというのである。

もちろん、奥野の現代生態学批判が妥当なのかどうか、門外漢である私にはよくわからない。それは、実際に自然の中での生物の生活がどんなものかを知らなければ何とも言えない事である。けれども、生態学が、単に研究者の知的な楽しみであるに止まらずに、最近のように、いわゆる環境問題や人口問題に発言することとなれば、自然認識の方法の誤りは、認識の結果の誤まりにつながり、まちがった自然認識にもとづく間ちがった政策で、私達の生活が左右される、ということになるのではかなわない。奥野は、多数の生態学者の発言を紹介しながら、彼らの社会的発言が全く見当はずれだと批判している。生態学者が生物の生活を無視した生態系生態学をつくり上げたのと同様の発想で、人間の生活を無視した地球管理の構想をつくり上げている、というのである。その最大の問題点は、

人間社会の階級構造を無視して、いわば富める者の立場で物事が考えられているところにあるらしい。もっとも、こういうところは、生態学という学問の問題というよりも、研究者の思想性の問題ではないか、という気がする。要するに、奥野は、現代の生態学者の思想性に腹を立てているのである。

それでは、奥野自身の思想性はどうなっているのか？　私が、この書物から判断する限り、彼は、かなり　　カルなアナーキストであるように見える。アナーキストといえば大変危険でならず者のように思う人も多いかもしれないが、そうではなくて、空想的理想主義者と言いかえてもよいかもしれない。何時の時代でもアナーキストはアウトサイダーでしかあり得ず、それ故にこそ、実権派（主流派）に対する根底的批判者となりうるのである。そういう点で、奥野の現代生態学批判の動機の純粋性は信用できるような気がする。

もっとも、アナーキストの批判は、実際家の立場からはいささか観念的であるように見えるのが通例だから、この場合も、批判された主流派の人々は、奥野の批判を「観念的」として（もっと悪く言えば負け犬の遠ぼえとして）無視するかもしれない。しかし「家つくりのすてた石が、すみのおや石となる」こともあるのだから、奥野に批判された、吉良、伊藤等、有力な生態学者はその批判に、反批判するなり自己批判するなり、キッチリ答える義務があろう。

一方、奥野は、彼の考えを「もう一つの生態学」としてまとめ、実際の自然の中での生き物の生活を観察することを推奨する。その場合彼が重視するのは種の進化の問題である。こういう「種の生態学」は、必らずしもあまり多くの研究費を要せず、アカデミズムの外側にいるアマチュア研究家にも近づけるものであり、単に生物の生活のみならず人の生活のにおいがするものだ、と主張している。

こういう奥野流の生態学は果して世の中の役に立つだろうか？　こういう問いに対しては、彼は明快に、「役に立つ」ということを断念していることを宣言する。そして、今まで、「役に立つ」と称しながら、生態学者の主流派が、いわゆる環境破壊に便乗して研究費をかき集め生長してきた事実を指摘し、今度は、金持のための地球の管理のお手伝いをしようとしている、と非難する。こういう形で「役に立つ」位なら、はじめから「役に立つ」ことを断念している方がましだ、と彼は考えているわけである。

生態学をめぐるこの論争（主流派が相手にしなければ論争にはならないが）の傍観者として率直に言わせてもらえれば、私は奥野のようなタイプの研究者の方が好きである。「役に立つ」と称して研究者が派手に逆立ちしてみせても、研究の成果は、大方、権力や財力のある者に（都合の良いところだけ）つまみ食いされ、研究者は地位と研究費を手にするだけで中味が空っぽになる事が多い事はウンザリするほど見ているからである。そして、ハッキリ断言できるような事柄は、大てい研究する前からワカっている事にすぎないのである。しかし、一言奥野に疑問を述べておくなら、彼のように実体に厳密に忠実に概念構成することにこだわらなくとも、ある程度実体とずれた概念でも、研究の方法として有効ならあっても悪くはないのではないか、という気がする。生態学のような、社会科学

に似た側面を持つ学問の場合には、概念と実体とのズレは宿命的なもので、大きくズレているか小さくズレているかにすぎないか、過程度の差があるだけだ、といってはいけないのだろうか。もちろんそのズレを忘れてしまわれたら困るけれども、全くズレがないような概念構成をしようと思えば、「種」という概念さえも消えてしまうのではないかと思うのだが、どんなものであろうか？

(サンクト　T・U)

!!!! 編 集 局 だ よ り !!!!

この号から、“編集局”が、独裁会長のもとからようやく独立いたしました。今後、編集権は編集局に所属することになったわけです。やっと独立を果して、よく考えてみたら、会則にこう書いてありました。「受けつけた原稿は、無審査・無修正のうえ、無責任に掲載する。」何のことはないこれでは来た原稿を並べるだけが仕事で、“編集権”のふるい様がありません。まあ、我らが“編集局長”を会誌のあちこちに出没させて、会長の悪口でも書きまくることにでもいたしましょう。では、どうかよろしく。

※ 昨年8月の第4号以来、8ヶ月もかかってしまいました。編集権をとられた会長が、ふてくされて、原稿を書かなかったのが原因です。会長が書かないと会誌が出ないというのでは、いまや150名以上の会員を擁する大学会として、あまりにもふがいない話です。大いに原稿をお送り下さい。

※ 今年は記録的な暖冬だそうで、雪どころ金沢でも、積もったのはわずか2回、それもせいぜい30センチどまりで、しのぎやすい冬でした。もっとも、金沢大学理学部生物学科では依然として“教授独裁”がつづき、教室会議は“凍結”されたままで、暖冬でも春が来ても、いっこうに溶ける気配はありません。

※ 書く、という作業はどうも大変なようで、「大作を書く」と言いながら、1年以上待たせている人が数人もいます。書かないのなら「書く書く」など言わなきゃいいのですが。

※ 書くコツは、「書くこと」なのだそうです。なんとなれば、「書かなきゃ、書けないではないか」残念ながら、これは会長の言であって、本当かウソか、編集局としましては、よう責任を持ちません。どなたか、試してみていただけませんか。

※ 新しく、広告のページを設けました。「ネイチュア」「サイエンス」、日本でも岩波の「科学」など、“一流誌”は広告だらけです。当学会誌の“質”の向上のため、大いに広告をおよせ下さい。なお、広告料はいただきません。

<<< 編 集 者 へ の 手 紙 >>>

※ ちょっと苦言を……

どの号を見ても、「撤回」を「徹回」とタイプしておられます。これは、わざとですか？ それ

とも字を知らないからですか？

※　おこたえ　―― 編集局 ――

この件につき、会長を問いつめてみました。結果は、以下のとおりです。

会長：「撤」なんて字は、当用漢字にはいっていない。したがって、わが和文タイプにもない。こまかいことにゴジャゴジャ言うな。

編集局：（タイプを調べて）「撤」はありますよ、ここに。

会長：ホントか！？　また当用漢字を変えよったな。

編集局：はじめからはいってましたよ。「字を知らなかった」のでしょう。

会長：いや、そうではない。「徹」底的に「撤」回させる"という意味で、「徹回」の方が「撤回」よりも、強い言い方なのだ。

編集局：？？？

広　　告　　欄

１９７９年２月１日、日本生物学会東海支部を設立しました。支部会則はつくらず、すべて支部長独裁をつらぬきます。それでも入りたい方は、どうぞ御連絡下さい。当分の間、支部会費はとりません。

東海支部長　　木村　光伸

岐阜県各務原市鵜沼古市場町３－３４

Tel．０５８３－８４－９３４４

２　　七尾火電反対闘争にカンパを！！

みなさんと全く関係がないのですが、全く関係のない人から、うまいこと言って金をまき上げるのが、「広告」というものです。

さて、北陸電力は、その組織と金と権力にものを言わせて、七尾市（横綱輪島の故郷です）のはずれの農漁村に、ごり押しで火力発電所を建てようとしています。これを、身体をはって阻止しているのが、わずか３０数世帯の漁師たち。どちらが正しいかは明らかでしょう。そこで心ある方は激励を、心なき方はお金を、下記までお送り下さい。

９２０　金沢市丸の内１－１　金沢大学理学部生物学科　奥野良之助

※※※ 会　計　報　告 ※※※

1978年4月　～　1979年3月

収　入		
100円会員	30人分	3,000円
1000円会員	75人分	75,000円
2000円会員	6人分	12,000円
寄　附	1件	1,000円
前年度くりこし		31、490円
計		122,490円
支　出		
上質紙	12000枚	19,800円
印刷用原紙	100枚	7,000円
封筒その他事務用品		2400円
送料（第2号）		9,220円
（第3号）		11,200円
（第4号）		12,060円
（新入会員用）		3,600円
計		65,280円
差引くりこし高		57,210円

以上のとおり、相異あるかどうか、だれにもわかりません。

日本生物学会誌　第５号　１９７９年５月１０日

編集・発行　日本生物学会
金沢市丸の内１の１
金沢大学理学部生物学教室
生態学第１研究室内

編集無責任者　奥野良之助